島根県立看護短期大学紀要
第12巻，79－90，2006

老年看護施設実習における学生の学びと指導上の課題の検討

加藤　真紀・梶谷みゆき

概　要

老年看護施設実習の学びを分析した。介護老人福祉施設，介護老人保健施設の学びのうち，【生活史・体験世界からの老年期の理解】【コミュニケーションを築いていく際の技術】【エンパワーメントを促進する援助の理解】【生活行為への援助の理解】【老年看護における倫理的態度構築の必要性】【施設ケアにおける看護師に求められる力・役割】の6カテゴリが共通していた。また，【施設ケアにおける他職種との連携の意義・必要性】，【維持期リハビリテーション実践の技術】【ヘルスアセスメントに求められる技術】は，それぞれの施設実習特有の学びとして得られていた。学びの関連，意義を考察し，学びの構造化の試案と今後の実習指導の課題を検討した。

キーワード：老年看護実習，施設実習，看護教育

Ⅰ．はじめに

島根県立看護短期大学看護学科では，1998年のカリキュラム改正により老年看護学が独立した。指定規則上では講義は成人看護学6単位，老年看護学4単位，臨地実習は成人看護学8単位，老年看護学4単位とされているが，本学におけるカリキュラムでは成人看護学と老年看護学とを同単位とし，それぞれ講義5単位，臨地実習6単位としている。よって，本学カリキュラムにおける老年看護学の教育が果たすべき役割は大きく，カリキュラム上の特徴と言える。老年看護学の臨地実習は，高齢者を中心とした保健・福祉施設で実習を行なう老年看護実習Ⅰ（以下老年看護実習Ⅰとする）を3単位（135時間），医療施設で実習を行なう老年看護実習Ⅱ3単位（135時間），計6単位で展開している。老年看護実習Ⅰは，介護老人福祉施設（以下，福祉施設）もしくは介護老人保健施設（以下，老健施設）で実施している。

1997年の保健師助産師看護師学校養成所指定規則の改正以降，老年看護学の施設実習における学習効果や指導上の課題等が報告されてきた（松田，1999）（濱畑他，1999）（水口，2000）（小野，2000）（島田他，2001）（沖中，2002）（小西他，2003）（久代他，2004）。

しかし，老年看護学の施設実習として同じ施設で3週間の実習を展開し，その学習効果を検討したものは見当たらなかった。また，福祉施設と老健施設では施設のもつ役割や，入所されている高齢者の特性が異なる面があるため，それぞれの施設にわかれて実習を展開する場合では，学生の学びに差が生じる可能性もある。

よって今回，老年看護実習Ⅰを通して記述された学生のレポートの内容を分析することにより，福祉施設及び老健施設の施設間での学びを明らかにし，どのような高齢者の特性や老年看護の学びが得られているかを検討する。さらに，その学びの構造を試案し，今後の実習指導上の課題を検討する。

Ⅱ．研究方法

1．対象およびデータ収集の方法

対象は，平成16年度3年次生において，老年

看護実習Ⅰを履修した学生80名が実習終了後に作成したレポートである。そのうち，本研究の主旨を説明し，データとして使用する事に同意の得られた75名の学生のレポートを分析対象とした。

2．データの分析

実習終了後に「実習を通して自らの援助過程を振り返り，今後の自己の課題を明らかにするとともに自己の老年看護観について考える」をテーマとして記述したレポートをもとに質的・帰納的方法により学びの内容分析を行なった。記述の内容から，「・・・がわかった」「・・・の重要性を感じた」「・・・が必要だと感じた」などの言葉を，学びの内容の表現と捉え抽出した。抽出した学びの内容を詳細に読み，その意味内容が変化しないように，また記述されている語録を残すように忠実に要約し，それぞれを1記述としてコード化した。学びの内容は，意味内容の類似性に従い分類し，サブカテゴリ，カテゴリへと抽象度を高め，その内容を表すようにカテゴリ名を命名した。さらに，そのカテゴリ間の関連性を明らかにするために，記述内容に戻りながら学びの構造の試案を検討した。なお，信頼性・妥当性を高めるために，共同研究者間で内容の検討を行った。

3．倫理的配慮

学生には，研究の目的，プライバシーの保護，研究協力は自由意思に基づくものであり，拒否する権利があること，協力の有無により不利益を受けることはないこと，データは本研究の目的以外に使用することはなく，匿名性を保持することを説明し，同意書に署名を得た上で実施した。なお，本研究は島根県立看護短期大学の倫理審査委員会の承認を得て実施した。

Ⅲ．実習の概要

1．実習目的および実習目標

老年看護学実習の目的は，「高齢者の諸特性を理解し，老年看護に必要な知識・技術と基本的な態度を養う」とし，その目的のもと，老年看護実習Ⅰと老年看護実習Ⅱの実習を展開している。老年看護実習Ⅰの実習目標は表1に示した。

2．実習方法

老年看護実習Ⅰの実習施設は福祉施設2施設，老健施設3施設の5施設で展開しており，学生はそのうちのいずれか1施設で実習を行う。原則1名の利用者を受け持ち，看護過程を展開する。この間，各実習施設においてカンファレンスを行っている。その内容として，実習2週目に，受け持ち利用者のケアプランの検討の場，実習最終日にケアプランを実践しての評価の発表の場を設定している。また，それぞれの実習施設にわかれている学生の学びの共有化を図るため，実習3週目に学内でのカンファレンスの場を設定している。内容は，各実習施設毎にカンファレンスで討議したいテーマを学生に設定させ，相互学習を促進できるようにしている。

また，オプション実習として，各施設における利用者向けの食事の試食，施設看護の実際を学ぶ半日の看護師実習，その施設が持つ通所サービスの体験等を行っている。

Ⅳ．結　　果

1．福祉施設および老健施設の学生数と記述の内訳

協力が得られた学生75名のうち，福祉施設で

表1　老年看護学実習Ⅰ　実習目標

1．高齢者の諸特性を理解できる。
2．健康障害をもって生活する高齢者の看護上の問題解決する方法の基礎を学ぶ。
3．高齢者を中心とした保健・医療・社会福祉の連携・協働のあり方と看護職の役割について理解し、相互に協力・協働できる能力を養う。
4．実施した高齢者への看護を振り返り、老年看護の実践者としての自己の課題を述べることができる。
5．高齢者の人権と権利を擁護する態度を養う。

実習を実施した者は36名，老健施設で実習を実施した者は39名であった。抽出された学びの記述内容の総数は147で，そのうち福祉施設70，老健施設77であった。

2．学生が捉えた老年看護実習Ⅰの学び

福祉施設の実習で抽出された学びは，33サブカテゴリ，7カテゴリであった（表2）。老健施設での実習で抽出された学びは，38サブカテゴリ，8カテゴリであった（表3）。以下，カテゴリは【 】で示す。

1）福祉施設実習の学び

【コミュニケーションを築いていく際の技術】は，学生が高齢者の理解と関係形成の為にコミュニケーションを築いていくプロセスから得た学びである。疾病，感覚機能に合わせたコミュニケーションの方法・留意点や認知症の特性を踏まえた支持的なコミュニケーションの方法・留意点などの学びがみられた。また，語りを聴く関係を構築することの意義・重要性や語りを引き出すコミュニケーション技術など言葉

表2 介護老人施設実習の学生の学び

カテゴリ	サブカテゴリ	小計	カテゴリ数計
生活史・体験世界の視点からの老年期の理解	高齢者の生活史を知ることの意味・意義	4	11
	認知症高齢者の関わりにおける，生活史を理解することの意義	3	
	全人的・多角的な捉え方の必要性	2	
	認知症高齢者の感じる不安，孤独感等の自己概念の揺らぎの理解	2	
コミュニケーションを築いていく際の技術	疾病，感覚機能に合わせたコミュニケーションの方法・留意点	4	23
	世代の異なる高齢者とのコミュニケーションの工夫	1	
	語りを聴く関係を構築することの意義・重要性	2	
	認知症の特性を踏まえた支持的なコミュニケーションの方法・留意点	5	
	認知症高齢者の言動の背景にある意味を考慮した関わり	3	
	認知症高齢者の関わりにおける援助者自身の感情コントロール力の必要性	3	
	非言語的コミュニケーションの活用とその意義	3	
	語りを引き出すコミュニケーション技術の必要性	2	
エンパワーメントを促進する援助の理解	高齢者のできることに注目した自立支援	3	11
	高齢者の意思を尊重した援助の必要性	3	
	高齢者ケアにおける自己決定を尊重することの意味・意義	3	
	認知症高齢者の残存能力を促進させるケアの必要性	1	
	認知症高齢者のスタッフ間の多角的なアセスメントの必要性	1	
生活行為への援助の理解	生活の場という視点での看護の必要性	1	12
	高齢者の他者とのつながりを支援することの必要性・意義	3	
	排泄ケア時の高齢者への尊厳の尊重の態度の必要性	1	
	生活の場の変化への適応を支援することの必要性	1	
	高齢者の生活習慣・生活様式を尊重した関わりの必要性・意義	2	
	認知症高齢者が安心して生活できる場の調整の意義	1	
	認知症高齢者における良好な人的環境作りの意義	3	
老年看護における倫理的態度構築の必要性	高齢者への尊厳をもった態度の必要性	1	3
	老年観の構築の意味・意義	1	
	認知症高齢者の自尊心に配慮した尊厳ある関わり方の必要性	1	
施設ケアにおける看護師に求められる力と役割	看護師に求められる健康管理・異常の早期発見・対応できる力	3	9
	施設看護として、ＱＯＬの視点を重視した援助の意義・必要性	3	
	看護師に求められる他職種との連携力	1	
	高齢者の個別性ケアを実践する技術力の必要性	2	
施設ケアにおける他職種との連携の意義・必要性	よりよい援助方法検討のためのスタッフ間の連携	1	3
	個別性の理解を深めるための他職種との連携	2	

表3　介護老人保健施設実習の学生の学び

カテゴリ	サブカテゴリ	小計	カテゴリ数計
生活史・体験世界の視点からの老年期の理解	高齢者の生活史を知ることの意味・意義	7	10
	認知症高齢者の関わりにおける，生活史を理解することの意義	2	
	加齢に伴う諸機能の理解	1	
コミュニケーションを築いていく際の技術	疾病・感覚機能に合わせたコミュニケーションの方法・留意点	4	20
	世代の異なる高齢者とのコミュニケーションの工夫	1	
	語りを聴く関係を構築することの意義・重要性	3	
	認知症の特性を踏まえた支持的なコミュニケーションの方法・留意点	4	
	認知症高齢者の言動の背景にある意味を考慮した関わりの意義	5	
	認知症高齢者の関わりにおける援助者自身の感情コントロール力の必要性	1	
	真のニーズを引き出すコミュニケーション	2	
エンパワーメントを促進する援助の理解	高齢者のできることに注目した自立支援	5	11
	高齢者の意思を尊重した援助の必要性	1	
	高齢者のペースを尊重した援助の必要性	1	
	高齢者の喪失体験に伴う自尊心低下への援助	1	
	高齢者への楽しみ・生きがい作りの重要性	1	
	認知症高齢者の意思を見出す（表示を促す）支援の意義	1	
	認知症高齢者のペースに合わせた介入の必要性	1	
生活行為への援助の理解	生活の場という視点での看護の必要性	1	9
	高齢者の他者とのつながりを支援することの必要性・意義	1	
	口腔ケアの必要性と意義	1	
	排泄のアセスメントと援助方法	1	
	排泄ケアにおける尊厳を尊重する態度・羞恥心への配慮の必要性	3	
	認知症進行予防のための環境調整・生きがい作りの必要性	1	
	老健の在宅復帰支援という役割の理解	1	
老年看護における倫理的態度構築の必要性	高齢者への尊厳をもった態度の必要性	1	1
施設ケアにおける看護師に求められる力と役割	看護師に求められる高齢者の健康管理，異常の早期発見・対応できる力	4	6
	在宅復帰支援における多角的なアセスメントの視点の理解	1	
	看護師による介護職への教育的関わりの必要性	1	
維持期リハビリテーション実践の技術	高齢者のリハビリテーションにおける生活史，趣味等を生かした個別性を尊重した展開方法	1	12
	高齢者のリハビリテーション意欲を支える声がけ	1	
	リハビリテーションにおいて，見守りと介助の区別の必要性と意義	3	
	高齢者リハビリテーションの実践における知識と技術力の必要性	2	
	自立支援における環境調整の必要性・意義	1	
	リハビリテーションにおける他職種との連携の必要性	1	
	自立支援の関わりにおける危険予測・予防の重要性	2	
	転倒予防ケアにおける自尊心を配慮することの必要性	1	
ヘルスアセスメントに求められる技術	高齢者ケアにおける多角的な観察視点の必要性の理解	6	8
	援助者に求められるケアの技術力と方法のバリエーションの豊かさ	2	

や思いを引き出す力，認知症高齢者の関わりにおける援助者自身の感情コントロール力の必要性など，関わり手の力量を高める必要性の学びが得られていた。

【生活行為への援助の理解】は，施設で生活をする高齢者の生活行為を支えるための援助のあり方やその実践方法の理解について述べた学びである。学生は高齢者と他者とのつながりを支援することの必要性・意義や認知症高齢者における良好な人的環境作りの意義など，人と人

との交流をつないでいく援助についての学びが多くみられた。

【生活史・体験世界の視点からの老年期の理解】は，高齢者を理解するプロセスにおいて，高齢者の生活史や体験している世界の視点から理解を深めていくことについて述べた学びである。学生は高齢者と接しながら，高齢者の生活史を知ることの意義を理解し，さらに高齢者を全人的・多角的に捉えることの必要性について学んでいた。また，認知症高齢者の関わりにおいては，生活史や日々大切にしている事象を知ることで認知症高齢者の体験世界を理解していた。

【エンパワーメントを促進する援助の理解】は，高齢者との関わりにおいて，高齢者のもっている潜在的な力や可能性について気づき，尊重すること及びそれを引き出していく関わりについて述べた学びである。学生は高齢者のできることに視点をおき，できるだけ自立した生活が営めるような支援について学んでいた。また，高齢者の意思を尊重した援助の必要性，老年看護における自己決定を尊重することの意義など，関わりの中で援助者が高齢者の意思や自己決定を支えることの必要性について学びの記述が多くみられた。

【施設ケアにおける看護師に求められる力と役割】では，看護師の健康管理，異常の早期発見・対応できる力，ＱＯＬの視点を重視した援助の意義・必要性などを学んでいた。

【施設ケアにおける他職種との連携の意義と必要性】では，施設での看護職・介護職の体制から，入所高齢者の理解・援助にあたって，それぞれの関わりから得られた情報などをいかに共有化していくかが重要であるということを学び，他職種間での連携の意義や必要性について述べていた。

【老年看護における倫理的態度構築の必要性】では，高齢者に対する尊厳を持った態度の必要性などの学びの記述が得られていた。また，援助者が築く老年観のあり様が関わりに反映されていくことに気づき，自分を振り返る学生もあった。

2）老健施設での実習の学び

【コミュニケーションを築いていく際の技術】は，福祉施設実習の学び同様に最も記述の多いカテゴリであり，内容も疾病・感覚機能に合わせたコミュニケーションの方法・留意点や認知症の特性を踏まえた支持的なコミュニケーションの方法・留意点などの学びが多くみられた。

【維持期リハビリテーション実践の技術】では，高齢者の維持期リハビリテーションの実践における知識と技術力の必要性について学び，リハビリテーションの関わりにおいて，見守りと介助の区別の必要性と意義や，自立支援における危険予測・予防の重要性などの学びの記述が多くみられ，高齢者の維持期リハビリテーションにおける専門性についての学びが得られていた。

【エンパワーメントを促進する援助の理解】では，福祉施設実習の学び同様に，高齢者のできることに注目した自立支援についての学びが多かった。そして，疾病に伴い機能低下や障害をもった高齢者が家庭復帰を目指してリハビリテーションに取り組む姿から，高齢者の喪失体験に伴う自尊心低下への援助や楽しみ・生きがい作りの重要性などの学びが得られていた。

【生活史・体験世界の視点からの老年期の理解】でも，福祉施設の学び同様に，高齢者の生活史を知ることの意味・意義について多く述べられていた。

【生活行為への援助の理解】では，排泄ケアにおける尊厳を尊重する態度・羞恥心への配慮についての学びが多く得られていた。排泄援助においては高齢者の羞恥心を伴ったり，介入方法によっては自尊心の低下を招いたりすることにつながる。そのため，排泄のアセスメントと援助方法についての基本的な学びから，羞恥心・自尊心への配慮という高齢者の自己概念を支える援助者という学びへ深まりがみられていた。

【ヘルスアセスメント展開の技術】では，老健施設において，高齢者の生活行為の維持・向上を目指して援助を展開する中で，多角的な観察視点の必要性やケアの技術力及び方法のバリエーションの豊かさが援助者に求められていることを学んでいた。

【施設ケアにおける看護師に求められる力・役割】，【老年看護における倫理的態度構築の

図１ 施設間の学びの共通カテゴリと相違カテゴリ

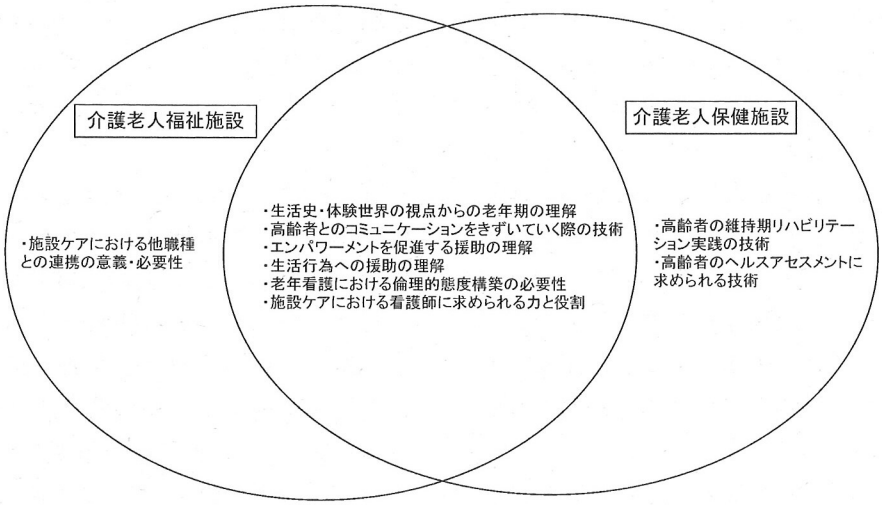
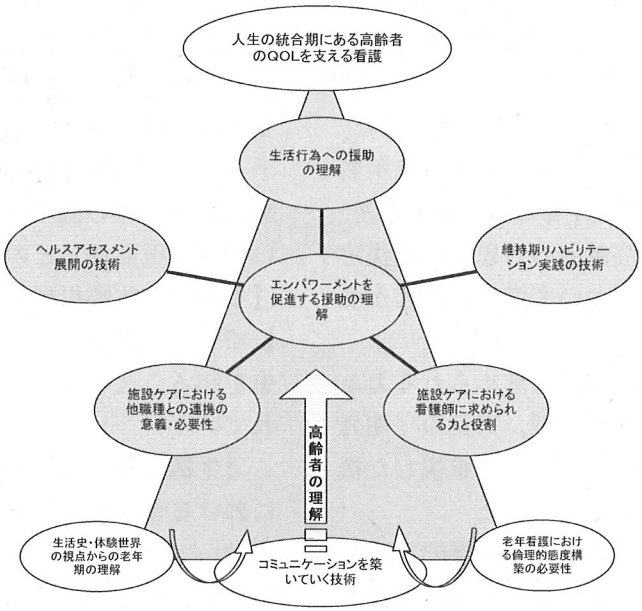


図２ 老年看護実習Ⅰの学びの構造化の試案



必要性】共に福祉施設同様の学びが得られていた。

３）老年看護実習Ⅰの学びの関連性

それぞれの施設実習から抽出されたカテゴリのうち，【生活史・体験世界からの老年期の理解】【コミュニケーションを築いていく際の技術】【エンパワーメントを促進する援助の理解】【生活行為への援助の理解】【老年看護における倫理的態度構築の必要性】【施設ケアにおける看護師に求められる力と役割】の６項目のカテゴリが共通していた。福祉施設のみから得られたカテゴリは【施設ケアにおける他職種との連携の意義・必要性】の１項目であった。また，老健施設からのみ得られたカテゴリは【維持期リハビリテーション実践の技術】【ヘルスアセスメントに求められる技術】の２項目であった（図１）。

さらに，学生が実習を通して学んだ内容から抽出したカテゴリについて，そのカテゴリ間の関連性を検討し，図２に学びの構造図を試案として示した。

高齢者の理解につながる【生活史・体験世界の視点から老年期の理解】，援助者の倫理観形成に繋がる【老年看護における倫理的態度構築

の必要性】を老年看護実習の基盤として基底面に配した。そして高齢者との関係強化と看護実践を展開するための重要概念として【コミュニケーションを築いていく際の技術】を基底面の中心に置き具体的な実践へつないだ。さらに高齢者への看護実践を通して，【エンパワーメントを促進する援助の理解】を中心に【生活行為への援助の理解】【維持期リハビリテーション実践の技術】【ヘルスアセスメント展開の技術】について学習する。また，学生の臨地実習として多くの時間をさいている医療現場とは異なる高齢者施設での実習において，【施設ケアにおける看護師に求められる力と役割】【施設ケアにおける他職種との連携の意義・必要性】は本実習の特徴であり，かつ基底面に配した内容の発展的な学びとして位置づけた。

V．考　　察

1．老年看護実習Ⅰの学びとその意義

高齢者は個別性が強く，長年の生活体験や人生経験により，身体的側面・精神的側面・価値観などに個別性が生じてくる。学生は，高齢者との関わりを通して，今の高齢者だけをみるのではなく，【生活史・体験世界の視点からの老年期の理解】をし，今まで生きてきた過程を含めた理解をすることの意義を改めて実感し，高齢者の理解の深まりにつながっていたと考える。また，高齢者と関わるとき，高齢者の生活史を十分に把握しアセスメントし，できるだけ生活史の延長で必要なケアが提供できるように支援することが重要である（奥野，2006）ことから，その基礎となる学びが得られていると考える。

【老年看護における倫理的態度構築の必要性】については，高齢者への尊厳をもった態度の必要性を述べていた。しかし，これは基礎的な学びにとどまり，老年看護における倫理的課題，高齢者の権利擁護について考えた学びに深まっていない現状がみられた。

学生は，高齢者と向き合い，高齢者の語りに耳を傾けながら理解を深めていく。しかし，高齢者は難聴や認知症などにより言語的なコミュニケーションが図りにくくなっている場合が多い。また，世代の違う高齢者とのコミュニケーションのすすめ方に戸惑うことがしばしばみられる。その戸惑いを起点として学生はどのような工夫・配慮により高齢者とのコミュニケーションを図るかということを学んでいる。また，先に述べた高齢者の生活史・体験世界を理解していくプロセスにおいては，高齢者の心の奥に潜む言葉や語りに耳を傾ける必要があり，人生経験や価値観など高齢者のその人らしさを発見するためのコミュニケーションとなる必要がある。志村は，「人生の語りを聴くにおいて，話し手と聞き手の関係性が非常に重要であり，他の誰でもないその聞き手がそばにいるからこそ，思い出す出来事，語られることがある」と述べている（志村，2005）。学生は，【コミュニケーションを築いていく際の技術】を活用して語りを聴く関係の構築することの重要性や語りを引き出すコミュニケーション技術の必要性へ学びを深めていくことにつながると考える。【エンパワーメントを促進する援助の理解】では，それぞれの施設とも，高齢者のできることに注目した自立支援について述べられていた。福祉施設へ入所している高齢者は，身体上または精神上著しい傷害があるために常時の介護を必要とし，かつ，居宅においてこれを受けることが困難な要介護者である（奥野，2006）。一方，老健施設へ入所している高齢者は，病状安定期にあり，入院治療をする必要はないが，リハビリテーションや看護・介護を必要とする要介護者である（奥野，2006）。そのため，学生は看護過程を展開する際に対象とする高齢者の様々な問題やできない部分について注目しやすい。しかし，学生は単にできない部分へ問題解決として援助を展開するだけでなく，高齢者のできる部分に注目した自立支援についても学んでいた。また，高齢者のペースや意思の尊重および自己決定を尊重することなど，実践において高齢者のエンパワーメントに向けた関わり方について学んでいたと言える。これらは，近年の施設ケアのなかに，高齢者のできることに注目したプランの立案や実践が導入されていることが関連していると考える。そういった高齢者ケアのあり方を体験することにより，学生の援助における学びが深まっていると考える。

【生活行為への援助の理解】では，学びの内

容としては共通しているものもみられたが，施設ごとの特徴もみられたカテゴリであった。福祉施設は，2000年４月から施行された介護保険法に基づき，可能な限り在宅復帰を目指す施設としても位置づけられたが，入所している多くの高齢者にとっては，未だ終の棲家となる場であり，そこで他の高齢者と集団生活をしている。また，急性期・回復期にある高齢者とは異なり，機能低下や障害があってもそのマイナスの状態を取り戻すという状況にすることができるとは限らない。学生は，その状況を捉えることによって，高齢者の生活を物的・人的な環境調整によって支えることや今までの生活習慣を尊重するといった学びにつながっていたのではないかと考える。一方，老健施設では，在宅への復帰を目指す高齢者にとって，排泄行動をいかに自立させるかという点においてその比重は大きく，介入の頻度も高い。そのため，現在の援助の先にある在宅復帰という目標を意識した学びや，在宅生活を意識した排泄行動への介入の実践からの学びが多くみられている。

【施設ケアにおける看護師に求められる力・役割】では，福祉施設における体制の中では，利用者の実際の援助を実施していく上で直接指導を受けたり，共に援助行為を行うのは，介護職員が中心となる。そのため，学生が看護師と直接関わる機会が少ないのが現状である。その中で，オリエンテーション時に看護師から直接，施設看護師の役割について話を聞いたり，オプションとして看護実習を半日行う中で得られる施設看護師の役割機能について学びを得ている。

老健施設での看護師は，日常生活の支援を介護職・看護職が協働した体制の中で行われており，看護師と介護スタッフの業務のおよそ８～９割は重複していると言われている（古田，2000）。そのため，どこからどこまでが看護でという線引きは困難な状況にある。福祉施設で実習した学生に比べて老健施設で実習した学生は，看護師と共にケアを展開する機会は多いが，反面日常的に行われているケアの中で看護師と介護職の役割機能の違いを捉えることに困難さがある。

その中でも学生の学びとして共通していた内容は，高齢者の健康管理，異常の早期発見・対応できる力であった。両施設の看護師の役割として，健康管理や疾患看護，とりわけ緊急時の対応は，的確な判断や応急処置などを，場合によっては一人で行わなければならず，その役割は重要である（古田，2000）（渡辺，2000）と述べられており，業務体制は異なる中でも介護職との協働の場である施設ケアにおける看護師に求められている役割は共通しているものであり，学生の学びからもそのことが同様に見出された。

【施設ケアにおける他職種との連携の意義・必要性】は，福祉施設からのみ抽出されたカテゴリである。渡辺は，福祉施設での看護の概念として，疾病と日常生活に障害を持っている入所者に対して，個々の生活スタイルを支持しながら，年をとり死に至ることについて一緒に考え，対処していくことであり，入所者のすべてをマネジメントするという考えが必要であると述べている（渡辺，2000）。しかし，介護保険における指定基準では，介護老人福祉施設の看護職の配置人数は入所者100人に対し３人であり，看護師だけではすべての援助を担うことができず，業務体制も明確に分けられていることが多い。入所者の生活や健康を支えていくためには，他職種との連携・協働が不可欠となる。その特徴が，学生の学びに現れていたと言えるのではないかと考える。

【維持期リハビリテーション実践の技術】及び【ヘルスアセスメントに求められる技術】は，老健施設からのみ抽出されたカテゴリである。自立支援を基本理念とした老健施設で実習を行った学生は，自立に向けてどのようなリハビリテーションが必要であるかを学び，さらに起こりうる危険を予測した予防的なケアが求められることを学んでいた。

また，現状の維持だけでなく，高齢者の抱えるさまざまな疾患や生活障害などを踏まえた上で，一人ひとりの高齢者が自立性をもった日常生活を確立していく方法を模索していく状況を実習で体験していく中で，自立のためのヘルスアセスメントの展開技術の必要性を学びとっていると言える。

以上，老年看護実習Ⅰの学びの内容を概観しその背景や意義について検討した。社会的な役

割や機能の異なる２種類の実習施設で実習を展開しているが，それらの実習で得る学生の学びは，多くの共通性があることがわかった。特に，【生活史・体験世界の視点からの老年期の理解】【老年看護における倫理的態度】【コミュニケーションを築いていく際の技術】【エンパワーメントを促進する援助の理解】【生活行為への援助の理解】で表現される内容は，高齢者が居る場や生活の場が異なったとしても，老年看護として必要な基本的な要素ではないかと考える。

２．老年看護実習Ⅰにおける学びの構造化の試案と今後の実習上の課題

学生の学びから抽出したカテゴリの関連性を検討し，老年看護実習Ⅰでの学びの構造を試案した。

学生が高齢者とのコミュニケーションをはかる過程で，生活史や体験世界についての語りを引き出すアプローチを試みている。高齢者が人生を通して築いてきた価値観や信念にふれることがコミュニケーション能力を形成していくうえで重要な鍵となる。さらに，高齢者自身が大事にしている価値観や信念，高齢者が持っている強みを理解し，それらを活かしたエンパワーメントを促進する援助や，生活を支える援助が，高齢者の満足感や自己効力感につながり，生活の質の保証と向上につながっていく介入に深化していくと考える。そしてこれらが統合されて，人生の統合期にある高齢者のＱＯＬを支えるという老年看護としての目指すところへつながっていく状況を，一連の学習過程のモデル図として構造図に表した。

しかし，学生の学びは，この試案の目指すところまで現状では到達していない。構造図を明確にしていくことは，学生それぞれの学びの意義を示したり，老年看護の目指すものとしての全体像をイメージ化し学びを発展・統合化させていくことにつながると考える。その意味で今回作成した構造図の検討を重ね学習内容と学習過程を明確にしながら，実習における学生の学びの統合化を図っていくように教育を改善していく必要があると考える。

また，学生は高齢者の語りを聴くための関係作り，高齢者の価値・信念にふれる語りを引き出すコミュニケーション能力について，その具体的な技法の獲得には到達できていないと思える。具体的なコミュニケーション技法やどのようにして学生のコミュニケーション能力を高めていくかという教育方法の具体化が課題である。

現在の看護過程の展開は，ロイの適応看護理論を基礎として展開している。しかし，近年では，2000年にＷＨＯから示されたＩＣＦ（国際生活機能分類）に立った高齢者の自立支援のあり方（大川，2004）や施設利用者のケアプランにストレングスモデルを活用していくことの有用性が示唆されてきている（白澤，2006）。伊藤も老年看護の特性を踏まえた考え方を基礎とした老年看護過程教育の検討の必要性について述べており（伊藤他，2005），老年看護学の看護過程教育の内容と方法が確立され，臨地実習においても高齢者ケアの看護過程として系統的に実践されるよう努力していく必要がある。

今回試案として示した構造図は学生の学びを研究者が系統立て整理したものであり，個々の学生がこれらすべてを学んでいる状況ではない。また，抽出された学びの内容は，老年看護における基本的かつ重要な要素が含まれていたが，施設間で共通している学びと共通していない施設特有の学びがあることが明らかになった。今後は試案として作成した学びの構造図の検討を続けながら，老年看護実習における到達目標の全体像とその学習過程を学生に明確に示すこと，学習目標と対象理解や看護過程の展開がより整合する理論枠組みを選択すること，施設間での学びの違いや学生間での学びの違いを補完することを教育的なかかわりとして改善し強化していきたい。

Ⅵ．ま　と　め

老年看護実習Ⅰ終了後レポートから抽出した学生の学びの内容を分析し，福祉施設及び老健施設の施設間での学びを明らかにした。その学びの構造化を試み，今後の実習指導上の課題を検討した結果，以下のような結論を得た。

１．福祉施設実習の学びとして，【生活史・体験世界の視点からの老年期の理解】【コミュニケーションを築いていく際の技術】【エ

ンパワーメントを促進する援助の理解】【生活行為への援助の理解】【老年看護における倫理的態度構築の必要性】【施設ケアにおける看護師に求められる力と役割】【施設ケアにおける他職種との連携の意義・必要性】の7カテゴリに分類できた。

2．老健施設実習の学びとして，【生活史・体験世界の視点からの老年期の理解】【コミュニケーションを築いていく際の技術】【エンパワーメントを促進する援助の理解】【生活行為への援助の理解】【老年看護における倫理的態度構築の必要性】【施設ケアにおける看護師に求められる力と役割】【維持期リハビリテーション実践の技術】【ヘルスアセスメントに求められる技術】の8カテゴリに分類できた。

3．上記それぞれの実習施設の学びから6項目のカテゴリが共通していた。これらは，高齢者が居る場や生活の場が異なったとしても，老年看護として必要な基本的な要素として学びが得られている。しかし，福祉施設の【施設ケアにおける他職種との連携の意義・必要性】，老健施設の【維持期リハビリテーション実践の技術】【ヘルスアセスメントに求められる技術】は，施設特有の学びとして得られていることが明らかとなった。

4．抽出した学びのカテゴリ間の関連を検討し，学生の実習の学びの構造図を試案した。学びの構造化は、実習の全体像や学習内容および学習過程を明らかにする上で有効であり，洗練するよう継続して検討する必要がある。

5．今後の課題として，①高齢者の理解や関係形成に重要となる，高齢者とのコミュニケーション力を強化するための教育方法の明確化②老年看護の看護過程教育の基礎が確立され，系統的に看護が実践できる教育の検討③実習の展開において，施設間や学生間で異なる学びを補完し合える場の設定④学生の学びが老年看護の目指す全体像へと統合化されるような教育の検討が示唆された。

謝　　辞

本研究の主旨を理解して，研究に協力していただいた看護学生の皆さまに感謝いたします。

文　　献

濱畑章子，田中優子，松岡広子(1999)：老人保健施設実習での学生の学びと指導の課題，愛知県立看護大学紀要，5，41-48.

古田美奈子(2000)：新時代に求められる老年看護－介護老人保健施設での高齢者看護－(第1版)，317-322，日総研出版，名古屋.

渡辺タツ子(2000)：新時代に求められる老年看護－特別養護老人ホームでの高齢者看護－(第1版)，323-337,

伊藤智子，加藤真紀，梶谷みゆき，礒村由美(2005)：老年期の特性を基盤にした老年看護過程教育の課題，島根県立看護短期大学紀要，11，109-118.

久代和加子，梶井文子，亀井智子(2004)：老年看護臨地実習の教育評価－介護療養型施設と介護老人保健施設で実施したことの意義についての検討－，聖路加看護大学紀要，30，97-103.

小西佳之子，下村裕子，藤森順子，ラウ優紀子，中澤千恵子(2003)：高齢者ケア施設における実習の成果と老年看護学教育の課題，慶應義塾看護短期大学紀要，13，91-101.

松田光信(1999)：特別養護老人ホーム実習における看護学生の学びについて，看護教育40(5)，379-383.

水口陽子，田中キミ子(2000)：特別養護老人ホームにおける老人看護学実習の学習内容－実習記録の分析から－，老年看護学，5(1)，131-139.

沖中由美，中野静子(2002)：老年看護実習における学びの分析，愛媛県立医療技術短期大学紀要，15，81-87.

小野正子，宮越不二子(2000)：本学における老人施設実習の学習効果についての検討，秋田大学医短紀要，8(2)，145-152.

大川弥生(2004)：介護保険サービスとリハビリ

テーションーＩＣＦに立った自立支援の理念と技法，55-76，中央法規出版，東京．
奥野茂代(2006)：老年看護学Ⅰ老年看護学概論（第3版），91，153-154，ヌーヴェルヒロカワ．東京．
島田広美，八島妙子，佐藤弘美(2001)：老人看護学の臨地実習で得た学びの分析，川崎市立看護短期大学紀要，6(1)，29-36.
志村ゆず(2005)：ライフレビューブックー高齢者の語りの本づくりー（初版），62，弘文堂，東京．
白澤政和(2006)：ストレングスモデルを活用したアセスメントとケアプラン，月刊ケアマネジメント，2，34-39.

Student Learning at a Gerontorogical Nursing Institution

Maki KATO and Miyuki KAJITANI

Abstract

We analyzed gerontological nursing practices at an institution specializing in the care and welfare of aged people. The six categories we studied were: 1) an understanding of the golden age from all experiences of a person's life history, 2) skill at the time of building communication, 3) an understanding of the assistance which promotes empowerment, 4) an understanding of the assistance to a life act, 5) necessity of an ethical attitude in gerontological nursing, and 6) the power and role of nurses in an institution. These were common themes at health care facilities for the elderly requiring long-term care. The following three categories were peculiar to each institution: 1) significance and necessity of cooperation with other workers in institution care, 2) rehabilitation practice skill in the maintenance term, and 3) skills required for health assessment. The relationship between learning and meaning were also considered as was the subject of a tentative plan for the structure of learning and future laboratory work.

Key Words and Phrases: gerontological nursing practice, institution practice, nursing education